

コモンで育ちあうエコヴィレッジコミュニティ —農村型戸建てコーポラティブの試み—

水上聡子（福井エコヴィレッジ研究会事務局長）
櫻井康宏（福井エコヴィレッジ研究会代表）

はじめに

昭和の地場産業を支えた繊維工場跡の原っぱ約1,200坪の土地が、エコヴィレッジ（*1）に生まれ変わりました。福井県坂井市 JR 丸岡駅西側にある農村集落の一角です。家々をつなぐコモンスペース（以下、コモン）には、県産材を用いた小道とセンターエリアが広がり、季節の野草が趣ある姿で存在しています。福井の里山を思いながら植えた様々な苗木も根を張り、少しずつ育ってきました。南側エリアの畑には野菜が育っています（写真 1,2）。

背景と目的

坂井平野は1,000年の歴史を誇る広大な米どころですが、時代の変化とともに耕作困難な田が開発され、小さな住宅地が点在しつつあります。スプロール現象は、景観だけでなく暮らしにも影響をもたらし、コミュニティの姿が変容してきました。

一方、地球温暖化に代表される環境問題のグローバル化により、省エネ・低炭素社会をめざすライフスタイルが急務となり、特にこれからの社会を担う子どもたちが、自らの住環境の創造プロセスに参画することは、とても重要と考えます。

こうした背景をふまえ、子どもと大人が一緒に取り組むエコヴィレッジづくりに着手しました。

計画経緯と考え方

東日本大震災（2011）直後の5月、福井大学の雑木林でまちづくりに取り組む学生が原っぱを訪れ、今後の社会について話し合いました。次いで市民グループとワークショップを開催。その後、福井県の住教育事業（*2）と集落子ども会との共催でむら探検のワークショップを2年連続開催しました。子どもたちが発見した集落の風景や田畑の恵み、住まいの工夫は日頃ほとんど意識しないことばかりで（写真3）、大人たちも興味深く発表を聞きました。

この頃より、福井大学大学院工学研究科の研究室にて建築や都市計画を専門とする有志5名が集まり、「福井エコヴィレッジ研究会」を立ち上げ、構想を練っていました。集落の土地所有者に相談し、具体的な計画づくりに着手。まちづくり市民財団（東京）から助成していただき、コーポラティブ方式を住民主導型ではなく研究会提案型でスタートさせ、居住希望者を募集しました（図1）。一方、新聞記事にも取り上げていただいたおかげで、新しい住まい方を提案することができました。

具体的には、8区画の家々が、自分の土地の一部の利用権をコモンに提供し、居住者どうしが皆で使う（共用する）こととし、一軒ごとでは十分に確保

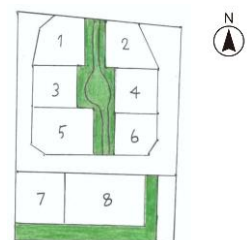


写真 1,2 現在のコモンの様子
(南北軸の小道、南面の畑)



図 1 基本構想イメージ
(北側道路から南方向を見る)

図 2 コモン計画図



Ecovillage community where residents grow each other through activities in a common space - Attempt for a cooperative housing in the rural area -

MIZUKAMI Satoko and SAKURAI Yasuhiro

できない庭や畑を皆で共用することによって広々と使え、居住者どうし交流できるというしくみです（図 2）。コモンに面する家屋は、垣根を外して縁側や土間を配置し、趣味活動の部屋を設けるなどセミプライベート空間として開かれています。

なお、これらの指針は、①案を作成した研究会、②居住者友の会、③造成事業を担当した事業組合の3者によって合意した「コモンスペース整備方針＋建築・緑化ガイドライン」が土台となっています。そして、「住民協定書」を締結することで、永続的な環境保全をめざしています。

以上のような土地利用のルール、空間配置や設計上の工夫、そして、コモンと一緒に作り上げる作業を通して、コミュニティを育ててきました。

居住開始後の活動状況

2014年3月いよいよ居住予定者によるコモンの整備活動がスタート。吹雪の日もありましたが、大勢の方々のご協力によって作業は大きく進みました（写真4）。居住予定者の中に樹木の専門家がおられ、皆で育てる緑地計画を作成できたことも大変有難いことでした。また、木を伐るところから完成まで家づくりのプロセスを参加型で成し遂げたお家もあります。現在4軒目の建設が始まりました。

2015年度には、まちづくり地球市民財団より防災・減災をテーマに助成していただき、緑地の排水改善、かまどづくり、炭焼きや薪ストーブなどエネルギー自給をめざした活動に発展しました（記事1）。これらのプロセスに子どもたちが参加し、苗を植えたりレンガを積んだり地味な作業ですが、集中して行う姿に励まされました。力を出し合うことの楽しさ、大切さを感じてくれていたらと考えます。

写真3 むら探検で縁側体験



写真4 手づくりのコモン整備



記事1 福井新聞(2016/4/14)



エコヴィレッジを訪れた方々は、コモンを歩き、子どもたちは走り、花を摘み、バーベキューをしたり、縁側にすわったりと憩いの場として過ごして下さっています。お茶室には、コモンの花が生けられ、学生たちが作業にかけつけてくれたり、応援して下さる方が苗木を分けて下さったり、皆で育てていくことの楽しさを分かち合える場になってきました（写真5,6）。

おわりに（評価と課題）

昨今、家の設計に子どもの意見を反映することはあっても、何もない土地から意見を出し合い、自分たちで住環境を創造していくコーポラティブのプロセスに子どもたちが参画する機会は、それほど多くないと考えます。これらのプロセスを通して、環境を自ら創造し、管理する大変さや楽しさ、責任意識、行動力、コミュニティのあたたかさ等を感じながら成長していってくれることを願っています。

県内初の試みで、居住希望者の募集、開発許可申請、大規模な造成、予想外の問題発生など様々な困難がありました。多くのボランティアの方々や市民グループ、アドバイスを下さった複数の専門家、助成財団、マスメディアの方々、行政関係者や事業関係者、地元自治会、研究会メンバー、そして困難を乗り越え事業を進めた事業組合のおかげで、最初の構想から5年の年月を迎えることができました。何より居住者の方々の主体性や信頼関係、コミットメントの姿勢がコモンのエネルギーになっていると確信します。

今後、残り3区画の居住者の方々を募集しつつ、コモンがコツコツと豊かに育つことを願います。

写真 5,6 コモンの子どもたち



*1 上新庄エコヴィレッジ

HP: <http://kamishinjo-ecovillage.com/index.html>

FB: <https://www.facebook.com/kamishinjo.ecovillage/>

*2 福井県の住教育事業

http://info.pref.fukui.lg.jp/kentiku/jyukyoku/09_sakai_city_higas_hijyugo.html